

Newsletter

バイオダイナミック農場 ソフィアファームでの農業実習(完全版)

9年生担任 神田 昌実

農業実習に行く前の準備

9年生の今年の夏休みは例年の半分強だった。8年生の終わりから「9年生は忙しいよー！」と予告はしており、新年度の始業日には8月までの1学期の予定表を貼っておいた。こうして布石を打った上で生徒たちから不満が出るのを極力抑え、怒涛の9年生生活が始まった。

農業実習は今までどの学年も學期内に行っていた。長期休暇を減らしたくないのは教員も同じだ。しかし、私の計算ではそれでは到底間に合わない程やることがあった。私の授業運びが遅いというのが大きな原因なので、そのことに関しては「先生！ 夏休みを使ってもやるべきことが終わらなかったらどうするんですか？」という不安の声もあがった。その返事には、「その時は積み残したまま卒業してもらいましょう。大丈夫、あなたたちの能力をもってすれば何とかなりますよ。人生は一生自己教育ですからね。その気になればいくらでも学べます。」と無責任に答え、皆を益々不安にさせたようだ。

それでも夏休み中にを行う農業実習や鍛金実習のための準備である天文学、地球科学、アイヌ文化、金属学などは一応1学期中に終え、訪問させてもらう農場で行われている農法に関する基礎も学ぶことができた。

5年生から始まる世界史の古代文明の中で学ぶことだが、最初の農耕・牧畜は古代ペルシャ（現在のイラン）で紀元前6000年ごろに始まった。日本では米作りが大陸から伝わってきたのが弥生時代（紀元前1000年頃～紀元後300年頃のことであるから、それよりも5000年も前から農業は行なっていたのだ。

「農」は「能」と等しく、農業は芸術・文化に通じていた。英語の agriculture も agri（田畑）+ culture（耕作）で cult は神のことだった。収穫を神に感謝した儀式が culture である。そのようにかつて農業は神とつながっていた。

1600年頃まで世界の人々は自給自足でその土地で育つ作物を食べて生活していた。植物の種類も多種多様であった。その後農業の研究が進み1800年代以降は新種が作られ、有能な種（しゅ）が残されるようになった。収穫量の多い品種が栽培されるようになり、植物の種類は減少した。

やがて肥料の研究も進み、窒素肥料が普及するようになった。しかし窒素肥料の副作用は作物の味や保存性を低下させた。また窒素肥料を作る過程で使用される有機水銀により中毒症状を起こす人々の症例が報告されるようになった。日本では1956年に水俣病と呼ばれる公害として発表されている。

1924年、農産物の収量が減り、病気も発生し、それを心



配した人々は労働者のためにたくさんの講義を行ってきたルドルフ・シュタイナーに解決法を見ねた。地球のエネルギーの枯渇を心配していたシュタイナーは農業講座を開き、彼が考える農法の話をした。しかしシュタイナーは翌年64歳で亡くなってしまう。そこで彼の弟子たちは彼が示唆した農法の実験を重ね Bio（生命）と Dynamic（力強い・エネルギーを生ずる）を合わせた造語としてバイオダイナミック農法という名前を使うようになった。＊以降 BD 農法と表記

1930年以降、経済学者の中に農業でお金を儲けるという考え方方が生まれ、農業は商売に変わっていった。1950～60年ハイブリッドという、種（しゅ）を交配して病気に強く収穫量も多い新種を作り出すことが始まった。しかしハイブリッドは種（たね）の採取ができないものだった。そこで農家は工場で作られた種（たね）を毎年買う必要があった。1970年以降にはクローン技術が始まり、1990年以降は遺伝子組み換え（GM = Genetic Modification）技術も確立された。植物は細胞さえあれば実験室で増殖できるようになり、見渡す限りの大規模農園で同じ種類の作物だけが作られるようになった。大量の化学肥料や農薬も使われている。

一方科学技術に頼らない農法も実践され、その一つがBD 農法である。（あとの2つは自然農法と有機農法であるが、それらも BD 農法の影響を受けていると言われている。）

BD 農法は土地のバランスを考えて野菜も穀物を作り、動物を飼う。他の農法と大きく違うのは、宇宙からのエネルギーを調剤（プレパラート）に入れ、自然との共存だけでなく宇宙とも一緒に働く、という考え方だろう。そしてその農法によって土地を癒す。地球を癒すために宇宙からの生きたエネルギーを使うというものだ。のために考案されたものが調剤だ。

調剤は、500番から508番までの9種類あり、牛糞、水晶、

ノコギリソウ、カモミール、イラクサ、檜の木の皮、タンボボ、カノコソウ、スギナ等から作られる。それぞれは、宇宙にある惑星（土星、木星、金星など）や、人間の臓器（肝臓、腎臓、脾臓など）に対応し、惑星や内臓の1つが欠けても全体のバランスがとれないのと同じように、9つの調剤のホメオバシー的な（微量な）エネルギーを大地や環境に入る事により、宇宙の調和がもたらされ、本来の健康で生命力に満ちた大地や環境を再生するというものだ。＊ソフィアファームのHPより

ドイツで作られた世界で最も古く最も基準が厳しいと言われるオーガニック認証の1つ、Demeter(デメター)認証はBD農法により生産された農産物や厳しい基準に則して加工されたBDの農産物からの加工品にのみつけることが認められている。特に欧米では、デメター認証を受けた農産物は、高品質であるとの信頼を得ており、一種のスタイルともなっている。残念ながら日本ではデメター認証は認められていない。日本では、商品に「有機栽培」や「有機野菜」などと表示するには、農林水産省が定める「有機JAS認証」を取得しなければならない。有機JAS規格という認証制度だ。この認証を最近ソフィアファームで取れたということを聞いた。一歩前進だ。

ここまで長々と農業実習に行く準備段階の説明を書いてきたが、耳慣れないBD農法を少しでも読者の皆さんに分かってもらったりた上で農業実習の活動をご報告したいと思ったからだ。

初日の流血事件

7月27日日本曜日、羽田空港に見送りに来てくれた家族をあとに、私たちは帯広空港に9:35に到着し、そこからレンタカー3台に分乗して、途中でお弁当を食べ、まずは宿舎となる北海道立体験活動支援施設ネイパル足寄（あしょろ）に立ち寄った。スタッフの方々に挨拶した後、往復便で送つてあった荷物を各自の部屋に運び入れ、その後、そこから車で20分ほどソフィアファームに行き、ファームを運営するキャンベルこのみさんと挨拶をした。パートナーのベンさんは広いファームのどこかで働いていてこの時には会えなかった。



このみさんの軽トラックを先頭に3台の車でファーム内を案内してもらった。ベンさんはアメリカ人だがご先祖はイギリスのスコットランド出身ということで、ファーム内の地名も「ニュースコットランド」や「リトルスコットランド」、そして北海道のコンビニと言えばセイコーマートなのだが、「セコマ」と呼ばれるT字路の交差点などを回った。

ちょうど香港のシャンハイ学校で仕事をしている方のご家族が2家族滞在中で、横浜の教員養成講座に在籍していた受講生がその学校で手仕事を教えていたという偶然にも巡り合った。その2家族が私たちのために夕飯を作ってくれた。Welcome dinnerである。

ベンさんも戻ってきて、初日はそのように顔合わせだけをして宿舎に帰り、入浴し、翌日からの労働を考えて早く寝るはずであった。しかし、夕べの会を終え、持参したパソコンで事務仕事も終えた私は玄関に行き、星を見て帰ってきた生徒たちに会った。「見えた?」「ばっちりです。」という会話の後、私も見に行こうと近くにいた伊藤先生と外に行くことにした。閉門の時刻を過ぎていたので玄関付近は真っ暗だった。懐中電灯を持っていかなかったが、大丈夫だろうと思った。伊藤先生に「暗いから気をつけくださいね。階段がありますよ。」と言われ、「そうだね。」と答えた瞬間「わあー！！」と2・3段しかない階段を踏み外し尻もちをついた。そのまま右側に体が倒れ、次の瞬間右側にあったコンクリートの壁に頭をぶつけた。結構な衝撃があり、打った部分を押さえながらも頭をよぎった思いは、（実習が始まってもない初日に私が入院なんてことになったらどうしよう！恥ずかしすぎる！）だった。

「大丈夫ですか？！」という伊藤先生に、「う～ん・・・」とあやふやな返事をした。そのうち温かいものが押さえていた右手から流れ出た。血だ！「わあ、出血してるー！！」と言って立ち上ると、血はボトボトと服に流れた。急いで持っていたタオルを頭に当てた。伊藤先生も慌てて他の先生方を呼びに行ってくれた。その騒ぎを聞いた生徒たちもやってきた。血を見るのが苦手なK.C.のことを思い出し、「Kはここに来ないよう言つて！」と生徒の誰かに言った。伊藤先生が持つて来てくれたタオルをもう1枚重ねて頭を押さえた。頭部はちょっとした怪我でも他の部分よりも多く出血することは知っていたので覚悟はしていたが、2枚のタオルは私の血で真っ赤に染まった。

近くの総合病院のその日の宿直は皮膚科の先生なので、吐き気や気を失うことがなかったなら明朝外科を受診した方が良いと病院の方に言われ、その日はそのまま寝ることにした。

翌朝、私は農場に向かう3台の車を見送った後、タクシーで病院に向かった。脳のCTは異常なし。胸をなでおろす。頭の傷は洗浄後ホチキス3針を留められガーゼを貼られネットをかぶせられた。迎えの車を待ちながらトイレの鏡でネット帽をかぶった自分の顔を見た。「コロボックルみたいだ。」傷はたいしたことがなかったしCTも異常なしだったので急

に元気が出て、（これは笑えるネタになったな）などとみんなの心配をよそに不謹慎なことを思った。

横山先生が病院に迎えに来てくれて、ファームでの午前の作業に途中から見学参加した。広大な大豆畑の雑草抜きだ。雑草地？と思うほど雑草しか見えない。大豆は背が高いのだ。一畝一畝腰を曲げ、草を分けて大豆以外の70～80cmもある雑草を根っこから抜く。大豆は茎にうぶ毛のような毛があり小さな白やピンクや薄紫色の花が咲いている。この花が受粉して枝豆になり、枝豆がさらに関して乾燥すると大豆になるのだ。根元の雑草を手でかき分けて採り、大豆を見ついたらその周りの草は抜くという作業の繰り返しだ。帯広は夏暑く、冬寒い土地だそうで、この日は34℃くらいあったと思う。みんな汗だくだ。

そこでこの日は、午後の作業は無しにして、近くの川へ泳ぎに行くことになった。香港のご家族が作ってくれた昼食を食べ、一旦宿舎に帰って水着に着替え再び川に向かった。川遊びには私も参加した。浮き輪が無かったが頭の傷を濡らすことはできないので（48時間は洗髪禁止と言われていた。）、横山先生の指示で丸太を持って来てくれた生徒から丸太2本をもらい、浮き輪代わりにして川の中を漂っていた。時々岩場で休む生徒に近づき「3日間漂流しています。助けてください。」と弱々しく言うと、「先生、ガチリアルだから、そういうのやめてくれる？！」と言われ、「ハハハ・・・」と苦笑しながらまた漂流していった。

横山先生曰く、「初日に全ての厄を神田先生が背負ってくれたから、この農業実習はもう大丈夫ですよ。」私もきっとそうだろうと思った。全ての災厄は私がいただきました、という気持ちだった。



ファーム内のあちこちの茂みにはラワン蕗（ぶき）という葉の直径が50cmもある蕗が自生している。それを折って傘のように差し、「コロボックルです。」とお道化ると、「昌実先生！ その怪我は笑い取りを狙ってましたね。」と爆笑しながら写真を撮る伊藤先生に言われた。「こんな痛い思いをしてわざわざ笑い取りなんか狙いませんよ！」と弁解した。とにかく大事にならずに済んで本当に本当に良かった！みんな



な、心配をかけてごめんなさい。深くお詫びいたします。

毎日の流れ

現地での生活を始めるまでは毎日の流れを具体的に思い浮かべることが難しかった。なぜなら農業は天候に左右される。天候次第でやることが急に変更になる。だから予定表を提出する必要があったネイバーフッドには到着日と帰宅日と遠足日と作業日の4種類しか提出せず、他の団体との兼ね合いは他団体を優先して組んでもらった。ネイバーフッドに滞在する団体（家族・親族の集まりや外国人が滞在することも可能だ）は長くても3泊4日くらいなので、2週間も滞在する団体は初めてだったらしい。

長く滞在すれば毎日ほんの少しの時間の交流しかできなくとも徐々にお互いを知るようになる。「ごちそうさまでした。」と食べ終わった食器を置きに行くときだけ言葉を交わした食堂のスタッフは、こちらの食べたい物を聞いて翌日に出してくれたり、メニューにはなかった物を出してくれたりといろいろ気を遣ってくれた。警備員の方は今どきわざわざ重労働な農業を都会から体験しに2週間も来たというだけでしたく感動してくれて、早朝4時の搾乳に出発するときにもドアを開けてくれたり、生徒たちを見るたびに温かい言葉をかけてくれたりした。他団体の子どもたちの活動のために天体望遠鏡で月の写真を撮るからと、うちの生徒たちに天体望遠鏡を覗かせてくれたスタッフもいた。



最終日に宿泊の支払いをした時には館長さんがこう言った。「私のおじも酪農をやっているので、その大変さは知っています。生徒さんたちは1週間が過ぎたころから顔つきが変わってきたね。逞しい顔になってきたなあと思いました。」8時には宿舎を出て、夕方事務所のスタッフが帰った後に帰る私たちとは、「おはようございます。行ってきます。」くらいしか言葉を交わしていないのだが、子どもたちの変化をこのように見てくれていたことがありがたかった。

作業日の一日の流れは、だいたい以下のようなだった。

4:20	朝当番が横山先生の車で出発
7:00～7:40	朝食（朝当番は6:50頃戻って来る）
7:50	朝の会（その日の予定を確認）@研修室
8:10	出発
8:30	ソフィアファーム着、このみさんより作業予定を伝えられる
8:50～12:00	途中休憩を入れながら作業
12:00～13:30	昼食、休憩
13:30～17:20	途中休憩を入れながら作業
17:40	ソフィアファームを出発
18:00	ネイバーフル寄着
18:00～19:30	着替え・洗濯物回収（伊藤先生の車か渡辺先生の車がコインランドリーに運び洗濯） 自由時間
19:30～20:10	夕食
20:15	夕べの会（振り返り・翌日の予定発表）@研修室
20:30～21:00	乾いた洗濯物の片付け・自由時間
21:00～21:30	入浴
21:30～22:00	自由時間
22:00	就寝

宿舎に帰ってからの自由時間にはその日の日誌をつけておくことになっていた。何をしたか、どのようにしたか、自分は何を感じたか、考えたかなどを書いておくことは実習中の重要な課題だ。

朝当番の仕事

朝当番は4:20に宿舎を出る。最初の打ち合わせでは5:00



に出れば良いことになっていた。しかし、今年は暑い日が続いたりアブやブヨが多く発生して牛たちを悩ませていた。そこで搾乳中の牛を虫から守るために、虫が少ない涼しい時間に搾乳を始めるようになった。牛優先の考え方だ。

朝当番の送迎は横山先生が担当してくれた。4:10に玄関前に集合し駐車場に行って4:20には出発する。3つの班が毎日交代で3回ずつ搾乳とコンポスト作りを体験した。

現在ソフィアファームには搾乳できる牛は2頭しかいない。ちなみに牛も人間と同じく女ならいつでも乳が出るわけではない。子どもを産まなければ乳は出ないのだ。言われてみれば当然のことだが、私たちは「牛乳」といういつも乳を出している牛がいると思ってはいないだろうか？

5年生の動物学で「牛」のことを学んでいたが、私もすっかり忘れていた。私たちが毎日牛乳を消費するために、乳牛たちは人工授精をくり返して子どもを産まされているのだ。

ソフィアファームでは自然交配が主で、人工授精はほとんどしていない。ここでも牛の自然のありようを重視している。そして生まれてすぐの子牛が母牛から離されて人工乳で育てられる一般的な牧場と違い、ソフィアファームの子牛は飲みたいだけ母牛の乳を飲み、余った分を人が飲むのだ。



現在出産した雌牛はハイディーとミニーの2頭だが、ミニーの子どもは死産だったので私たちは主にミニーの乳を搾らせてもらった。ハイディーの子どもは飲む量が多く、搾れるほど残っていないのでハイディーの搾乳はほとんどしなかった。

朝当番はソフィアファームに着くと長靴に履き替え、帽子を被って軍手をして装備を整える。それから牛たちの飲み水をこのみさんが運転する軽トラックの荷台の300リットルくらい入る大型ボリタンクにホースで入れる。この水は湧き水で水道水ではない。ちなみにソフィアファームの水道の蛇口から出てくる水はすべて湧き水を使っているので非常に冷たく美味しい。

水が汲めたら横山先生は別の軽トラックを運転し、その荷台に朝当番の5～6人の生徒たちが乗り込んで、搾乳小屋のあるリトルスコットランドの丘に向かう。牛たちの飲み水を汲み足してから作業開始だ。リトルスコットランドに着いた頃に遠くの山の上に朝日が昇る。拝みたくなるような光景だ。

自分が存在しているこの世界のすべてに感謝したくなつた。

搾乳する者は毎日2～3人でこのみさんに見本を見せてもらつてから搾乳に挑戦した。搾乳時の衛生管理もしっかりとしないといけないので、牛の乳房や人の手の消毒は酢で行われた。そして搾乳小屋では静かにすることが鉄則。ある意味、牛も人間も搾乳の間は瞑想している時のように平安に満たされた時間を共有している。このみさんは牛を安心させるために「ミニー、Good girl」と呼びかけながら優しく英語で子守唄を歌つて搾乳する。このみさんの乳しぶりはリズムがあり、歌に合わせて乳がバケツにシュー、シューと溜まつていく。それを聴いている生徒たちもついコクリコクリしていく可愛かった。

搾乳小屋の平和な雰囲気とは裏腹に隣の牛小屋では、牛糞班が牛糞にまみれた藁をフォークでくい上げては軽トラックの荷台に積むという作業に汗を流している。軽トラックがいっぱいになつたら、横山先生が運転して100mほど離れた牧草地の端に作られたコンポストの山の上にそれを積み重ねに行く。コンポストの山は長さ30m、高さ70cm、幅は上底1m下底1.5メートル程の断面が台形になったものだ。そこに牛糞の藁—緑の草—去年の干し草という順番で何回も重ねてミルフィーユ状にしていく。牛糞の藁は朝当番が集めたもの、緑の草は大豆畑の雑草、干し草はコンポストの近くに置かれた昨年のロール状のものだ。



朝は時間に余裕がないので、横山先生は軽トラックに牛糞の藁を積み、そこに生徒を乗せて食堂や事務所のあるファームのエントランスともいえる場所に下りてくることが多かつた。ミルフィーユの上に牛糞の藁を重ねるのは午前の仕事に回すのだ。

そして6時過ぎまで仕事をしてから朝当番は宿舎に戻ってきて、皆と合流して朝食をとつた。

これを毎朝引き受けてくれた横山先生には感謝してもしきれないありがたさを感じている。

意外に大変だった洗濯事情

生徒16人教員4人、総勢20人分の汗と泥にまみれた作業着を洗濯することは思っていた以上に大変だった。ネイパル足寄には洗濯施設はない。かつては家庭用洗濯乾燥機の使用が可能だったらしいが、コロナ禍以来それは禁止されてい

た。車で3分の場所に大型コインランドリーがあり、私たちはそこを利用した。最初は2日に1回の洗濯でよいだろうと思っていた。しかし到着2日目に洗濯物を回収してその量の多さに驚いた！洗濯から乾燥まで1台の洗濯機ができるのだが、終わるまでに60分かかり、その日は一度に使えたのが2台だったので大型と中型を2サイクル回さねばならず、食事後も伊藤先生と渡邉みやお先生はコインランドリーまでを2往復した。しかも各自のネットに入れたままで乾燥したため洗濯物は生乾きで、狭い女子部屋はロープが縦横に張られそこに洗濯物ののれんが下がり、その湿気と暑さとで女子はよく眠れず、可哀そうなことをした。

翌日からは洗濯は毎日することにした。洗う時にはネットから出して洗濯機に入れ、乾いたものは構わずネットに突っ込んで宿舎で広げられた中から各自が自分の物を回収するというやり方だ。もちろん男子と女子は別々の洗濯機で洗つた。私が「一緒でもいいじゃない。最後はすぐんだから、みんなきれいなはずだよ。」と言うと、男子からも女子からも軽蔑の眼で見られた。

結局、誰のだかわからない状態で男子部屋と女子部屋に乾燥後の洗濯物は運ばれたので、やはり男女は分けなければいけなかった。

私は毎日伊藤先生かみやお先生に財布を渡し、洗濯を行つてもらってその金額を聞き、収支に記録した。多い時には一気に4台の洗濯機を回している。ネイパル足寄に東京からインターハイに出る高校女子バレー部が来ていた時には、コインランドリーはそこに占領されてしまい、伊藤先生とみやお先生は車で20分の隣町本別のコインランドリーまで行ってくれたこともあった。

洗った物は毎日乾いて戻るので、衣類を多く持つてこなくても大丈夫だということが分かった。特に農作業用の汚れても良い服の、ズボン・上着・靴下・首に巻くタオルは1組あれば足りるかもしれない。これから行くクラスの参考にしでもらえれば幸いだ。

伊藤先生とみやお先生はおそらく毎日夕方になると洗濯のことを考えずにはいられないからだろう。お二人にも心から感謝したい。

農作業をしなかつた日

BD農法は種蒔きカレンダーにできるだけ沿つて農作業を行つている。種蒔きカレンダーは太陽や月、惑星たちからの宇宙のエネルギーがいつどのように地球上に注がれ、それを地球上の生き物が受け取っているかを植物を中心に観て作られたカレンダーだ。1年365日を24時間で分けて、何月何日の何時頃から何時頃までは種蒔きに良い、何時頃から何時頃までは農作業はしない方が良い、などと明確に書かれている。

私たちが滞在した2週間の間に丸一日農作業に適さない日があった。したがつてこの日は作業を休みにして足寄から北に車で2時間ほど行った阿寒湖に観光に行った。事前に学習したアイヌ文化に触れる遠足だった。



アイヌシアターイコロでのアイヌ民族舞踊「古式の舞」を観る以外に団体行動はほぼ無く、その前後は自由行動だった。自分のお小遣いからお土産代や昼食代を出すことになっていた。阿寒湖周遊の遊覧船に乗っても良かったのだが乗船料金が高いのでみんな節約して湖は湖畔から見るだけにしたようだ。自由行動と言っても大きな町ではないでお土産屋さんに行けばうちの生徒たちがお土産を見ているのに出会った。

「北海道に行ったらセイコーマートのコーヒーゼリーを食べるといい！」と家族に勧められていたLOは阿寒湖近くのセイコーマートで早速コーヒーゼリーを買い、食べようとして製造元を見たら「長野県安曇野市」、更にその店内で作られている唐揚げを買ったら鳥肉はブラジル産だった。という話がこの日の夕べの会で披露され、皆は笑わざにはいられなかった。この日は皆が買ったお土産のお披露目もした。両親や祖父母、兄弟姉妹へのお土産の選び方に個性が出ていて面白かった。部活動の指導してくれている保護者の方や後輩たちへのお土産もあり、皆の気配りに感心した。私はクラス用にマリモが入った3分液体時計と十日市場校舎用にアイヌの木彫りの靴ベラを買った。十日市場校舎にいらしたら皆さんも使ってください。

この遠足は到着後5日目の7月31日(月)に行われたが、それ以外で農作業をしなかった日がもう1日あった。それは種まきカレンダーによる休耕日ではなかったが、遠足の日から5日空けての休養だったので生徒たちにはちょうど良かったと思う。

8月6日(日)私たちの朝当番は休みにしたが、このみさんはいつもの通り搾乳をしていたはずだ。誰かに頼まない限り農業に休みはない。

私たちは朝食後に朝の会をしてから車で近くの道の駅「足寄 銀河ホール21」に行き、物産品を見たり買ったり、足寄の有名人松山千春の石碑のボタンを押して、彼の歌を何度も聴いたりしていた。その後は、これも近くの化石博物館に行った。太古の昔(2800万年前)、足寄は海の中だったことが明らかになっていて、そこに生息していたカバのような、ジュゴンのような、体長2mくらいの哺乳類アショロアの

化石や他の海獣の骨格標本を観た。私は昨年の下見の時にアショロアのTシャツを買っていたのでそれを着ていった。受付の方がすぐにそれに気づいて下見の時のことを思い出してくれたのが嬉しかった。

この日の昼食はソフィアファームに行きお好み焼きや焼きそばをテーブルごとにカセットコンロで作るというちょっと楽しいものだった。

午後からはベンさんとこのみさんがネイパル足寄に来てくださり、集会室でBD農法やミツバチのこと、CSA(Community Supported Agriculture)についてなどを熱く語ってくれた。CSAとは消費者が年間で野菜や加工品などの購入費用を農家に前払いし、天候不順などによる不作のリスクを農家と共有して農家を支えていくというシステムだ。地域で取れた作物はできるだけ地域の消費者が食べるという地域支援型農業で、農家と消費者がお互いに顔を見て、旬のものを安心して買うことができる上、時には消費者が農家に授農に行き、農業を自分事として考えることができるのだ。CSAはBD農業に限らずどこででもできることだと思う。

現在食べ物のほとんどを輸入に頼っているこの国の未来を私たちはもっと真剣に考えなくてはいけないはずだ。私たちは自分たちがこの世を去った後に子や孫に今よりも豊かな環境を残す責任がある。ナバホ族の格言にあるように、私たちが利用している自然は子孫たちから借りているものなのだ。農業実習を体験してこういう思いがひしひしと湧き上がってきた。

調剤作り、調剤散布、調剤掘り出し、調剤埋め

BD農法で特別なのは、やはり宇宙のエネルギーを大地に還元するという調剤だ。調剤は水に溶かして散布するものと堆肥の中に埋めるものがある。調剤が500番台ばかりなのは現代がシュタイナーの宇宙論・地球論における地球紀の中の、後アトランティス時代の、第5文化期だからだと聞いたことがあるが、これに関してはここでは触れないでおく。

散布する調剤は500番、501番、それとマリアトゥーンと呼ばれる502番から507番までを含んだ特別な調剤の3種類だ。残りの502番～506番は堆肥の中に穴を掘ってスプーン1杯くらいずつを埋めるものだ。507番は502番～506番を埋めた堆肥の上に水に溶かして撒拌した後にじょうろなどでかけるもの。508番に関しては今の私にはわからないのでこれは省略する。

私たちが散布したのはマリアトゥーンだと思うが、見かけは土であった。これを両手一杯くらいもらい、直径が1mもある大きな木の樽(元はワイン造りで使っていた)に湧き水を七分目ほど入れたところに、穏やかな優しい気持ちで愛をこめて入れる。入れる人の気持ちも大切なのだ。それをダイナミゼーションと言われる混ぜ方で20分間混ぜた。

ダイナミゼーションとは横浜の霧が丘校舎の校庭に「お庭の会」のメンバーが撒いているやり方と同様、桶の中の水を腕や棒を使って渦潮のようにグルグルッととかき混ぜ、それ



が頂点に達した時に一気に逆回しをして渦を壊し、また逆の渦を勢いよく作るということを繰り返すものだ。これにより水の中にその調剤の力が刻印される。

渦を壊すところで次の人に交代しながら全員がこの作業を行った。大きな樽に上半身を入れるような格好で水を渦にすることは結構重労働だった。最後は力自慢の男子たちがこの作業を請け負っていた。

ちなみにマリアトゥーンという調剤はドイツのマリア・トゥーン女史のレシピに基づき、作られたもので、バイオダイナミック農法に転換したい土地などに有効そうだ。これを撒くことによって、その後に撒かれる 500 番や 501 番の調剤もより効果的に作用し、2 年間使い続けると有害な化学肥料や農薬の残留物質は土壌から消失すると言われている。
*ソフィアファームの HP より

放射能の害が心配された 2011 年以降、横浜シュタイナー学園では熊本の BD 農場ぼっこわばから調剤を頂いて、校庭に撒いたり、街路樹の桜の葉から作ったコンポストに埋めたりしてきた。そのおかげか、狭いながら当校の校庭の植物は勢いがあるよう見える。

話しあは戻り、このダイナミゼーションした調剤はその日の内に散布した方が良い。私たちは調剤を樽からコンテナに詰め替え、草抜きが終わった大豆畑に軽トラックに分乗して向かった。そして自生しているクマザサを束にしてざくざくと



切り各自が利き手にそれを持った。もう片方の手には調剤を入れたバケツを持ちクマザサの束をバケツの調剤に浸け、虹を描くように優雅に撒きながら進む。この時の気持ちも穏やかな幸せな気持ちであることが重要だ。この一しずくが大地に触れた瞬間に、そこからジワーッと周囲に広がるイメージだそうだ。だから全部の作物にかける必要もなく優雅に進めばいい。夕日を浴びてバケツを持ち、クマザサで虹を描きながら調剤を撒く生徒たちはとても美しかった。

この作業は 2 日間続き、翌日は広大な牧草地に 1 列に並んで調剤撒きをした。この光景も絵のように美しかった。軽トラックの荷台に乗って、調剤散布をしていた生徒たちはトラックの揺れで自分たちがビショビショになったとぼやきながらもすごく楽しそうだった。道無き道の藪の中をノシノシ進んで調剤を撒いて行く作業に大きな喜びを感じた私は、自分が道無き道を行くことが好きな人間なのだと改めて分かった。人生は冒險だ！

調剤撒きをした翌日の午後、私たちは今まで行ったことのないイラクサの茂った藪の近くに案内された。と言っても草抜きをしていた大豆畑のすぐ近くなのだが。そこには 2m くらいの 4 本の棒が正方形の頂点に立っているように刺してあった。この正方形の中に、500 番の調剤が 2 年前に埋められたのだ。それを掘り出す作業がこの時の仕事だった。男子 2 人が最初は勢いよく正方形の中で土を掘っていたが、50cm くらいの深さまで掘ると、固いものにスコップが当たった。ここからは優しく丁寧に掘っていく。牛の角と蹄がびっしりと並べて埋まっていた。角や蹄を割らないように一つずつ掘り出し、コンテナに入れていく。コンテナ 3 つがいっぱいになるくらいの角と蹄が掘り出された。



その後、ベンさんは軽トラックの荷台に腰を掛け、私たちは草の上に腰を下ろして、青空講義が始まった。牛の生活、ソフィアファームの誕生のいきさつ、BD 農法について、牛の角入手することが難しくなってきたのでベンさんが蹄も使うことを考え出した話等々、話は尽きない。もしもファーム内に泊まっていたらこういう時には夕飯後に焚火でも囲みながら話の続きを聞くのだろうに、宿舎の夕飯の時間に間に合うように帰らなければいけない私たちは残念ながら講義を中断せざるを得なかった。

その後の調剤に関する仕事は、牛の頭蓋骨に詰められたミズナラの樹皮をベンさんお手製の大きな搔き出しスプーンのような道具で搔き出すこと（506番）や掘り出した牛の角や蹄の中に詰めてある牛糞を搔き出す仕事（500番）、ノコギリソウの調剤（502番）を大きな板の上で皆で手の平でサラサラにはぐしてビンに詰めなおすことや新しい502番作りのためにノコギリソウを集め、花だけバラバラにしてそれを鹿の膀胱に指で詰めていくという誰もが驚くような作業



をした。鹿の膀胱は鹿料理を出すお店にお願いして取っておいでもらっているそうだ。それにストローで空気を入れ風船のようにふくらまし、乾かして保存しておく分も作った。鹿の膀胱は肉とか臓物というよりも甲殻類の様な臭いがした。それほど嫌な臭いではない。それにしてもこのような作業を生徒たちは嫌がりもせず、おしゃべりしながら楽しそうに行っていたことが印象的だった。ファームの仕事も10日目になると、どんな作業も大切なものに思われてきたのかもしれない。

作業の最終日（13日目）、毎朝の朝当番が積み上げてきたコンポストの山に調剤を埋める作業をした。山の高さは私の首のところくらいまで高くなっていた。積み上げたコンポストの山の指示された場所に長い鉄の棒で穴を開け、そこに502～506番の調剤をそれぞれ決められた穴におにぎりの具のようにコンポストでくるんで丸めて入れ、穴をコンポストでふさぐ。調剤のおにぎりも心を込めて握り、心を込めて



穴に入れる。調剤を入れる前に穴に手を入れてみると中は発酵していてホカホカと暖かかった。

調剤を埋め終えたら、コンポストの山全体にカノコソウの調剤（507番）を水に入れ20分間攪拌したもの撒く。このことにより堆肥の発酵を助け、堆肥を活性化させるのだそうだ。この堆肥の山は1年間寝かすのだそうだが、その間に牛糞や糞、緑の草、干し草などは全て土のようになるということだった。そう言われば他の調剤もすべて土のようになっていた。フレッシュな牛糞を詰めたはずの角や蹄の中身も搔き出すときには見かけも手触りも臭いも土になっていた。不思議なことだ。

終わりに

生徒たちは農業実習の2週間でどのような感想を持ったのだろうか？

最後の夜の夕べの会で皆に聞いてみた。「本当は農業実習は3週間したいんだけど、あと1週間延びますって言ったら悲しい人はどのくらいいる？もうお家に帰りたい人？」4人くらいの女子が手を挙げた。お母さんの料理が恋しいと言った子もいた。それ以外の男子全員と女子5人は、もっと居たい。もっと働きたい。と言ったのを聞いて私はほっとした。

帰って来てから書いた農業実習の感想には、次のようなことが書かれていた。

「最初、農場を見て、ここは本当に日本か？！と思った。」「クラスメイトの知らなかった面を見られて新鮮だった。」「調剤が神秘的だった。」「ベンさんとこのみさんの牛や農場に対する愛が半端じゃないと感じた。」「農業実習を象徴する言葉は、自由・豪快・挑戦の3語だと思った。」「もう2週間は居たかった。（女子）」「ソフィアファームは地上の楽園のように見えた。」「調剤を撒いた翌日の植物は確かに違っていた。太陽に向かってぐんぐん伸びているようだった。」「調剤をグルグル回しているだけなのに幸せな気分になった。」「ミツバチの話や種まきカレンダーの話が興味深かった。」「自然の力は凄い。」「ジャージー牛乳とそれから作ったソフトクリームの味が忘れられない。」「大豆に虫がほとんどついていなかったのが不思議だった。」他にも沢山あるが書ききれないのでこのくらいにしておく。

「農業実習はどうだった？」と聞かれると答えに困った。「すごく充実していて大きな学びがありました。」と無難に答えはするものの、色々ありすぎて一言では言えないものだった。生徒たちも皆、「聞かれると困る。色々ありすぎて・・・。」と言っていた。2週間も寝食を共にしたのは皆初めてのことだ。思春期の人間関係の微妙な部分も時々垣間見た。しかし、深刻な事態にはならず最後は皆、怪我も病気もなく満足して実習を終えられた。これだけで十分だ。そして彼らの内面に何かしらの種が蒔かれたのではないかと思う。それがどういう形で芽を出すかわからないが、農業に対する見方が少しでも身近になっていることを期待したい。

松山千春の石碑の前で皆が何回も聞いていた歌を9月の朝のリズムの時間に歌った。この歌詞が良いと言った子がいた。この歌詞に感動できるなら彼らは順調に育っていると言えると思う。皆が幸せな人生を自分の腕でつかんで生きて行くことを心から願っている。

そして、こんな貴重な体験を細かい部分まで準備してくださり、牛や農場を心から愛しているベンさんとこのみさんご夫妻に深く感謝したい。これからも生徒たちを是非お願いします。ソフィアファームの発展を心底願い、応援したい。地球のために、人類のために、未来のために。

「大空と大地の中で」 松山千春
果てしない大空と 広い大地のその中で
いつの日か幸せを 自分の腕でつかむよう
歩き出そう明日の日に 振り返るにはまだ若い
吹きすさぶ北風にとばされぬよう とばぬよう
こごえた両手に息をふきかけて しばれた体をあたためて
生きる事がつらいとか 苦しいだとか言う前に
野に育つ花ならば 力の限り生きてやれ

果てしない大空と 広い大地のその中で
いつの日か幸せを 自分の腕でつかむよう

(一部抜粋)

横浜シュタイナー学園 ~ Newsletter 第161号~
2023年10月28日発行

編集：広報の会
発行：NPO法人横浜シュタイナー学園
<https://yokohama-steiner.jp>
〒226-0016 横浜市緑区霧が丘3丁目1-20
TEL 045-922-3107
※掲載内容の無断転載をお断りします